

凍りつく

小倉 一純

前屈みで文章を綴っていたら腰痛になった。
私は文筆家の端くれだ。

何とかいう製薬メーカーの痛み止めを購入した。生薬成分配合でよく効くらしい。

その日も午後となりスーパーへ出かける時間になっていた。Tシャツの背中をまくり上げ、プシューッとスプレー缶を噴射した。凍りつくような一瞬の冷たさの後で、今度は生薬成分と思しき何物かが皮膚の内側へ浸透していくのを感じる。いいぞ！腰が軽くなってきた。これで準備万端だ。

私はスーパーの売り場で総菜を物色していた。高齢の両親の口に合うものを探していたのである。と突然、後ろを歩く女性がつぶやいた。

「くさいわっ」

それまで気づかなかったが、生薬を吹きつけた私の腰は強烈な臭気を放っていた。とっさに思いついたことを私は口にした。

「いやあ奥さん、腐ってしまうので、どうし

ても防腐剤が必要なんですよ」

「えっ」

「ほら今、真夏だから、何でも腐るでしょ」

「あなた一体、何をいつてるんですか？」

「実はね私、三日前に死んでるんですよ」

「ええっッ」

「高齢の両親がいるんで、食事の用意をしなければならなくて。だからこうして、自分の体に防腐剤をスプレーしながら、買い物に來てるんです」

振り向くとそこには、表情を凍りつかせた主婦が佇んでいた。